

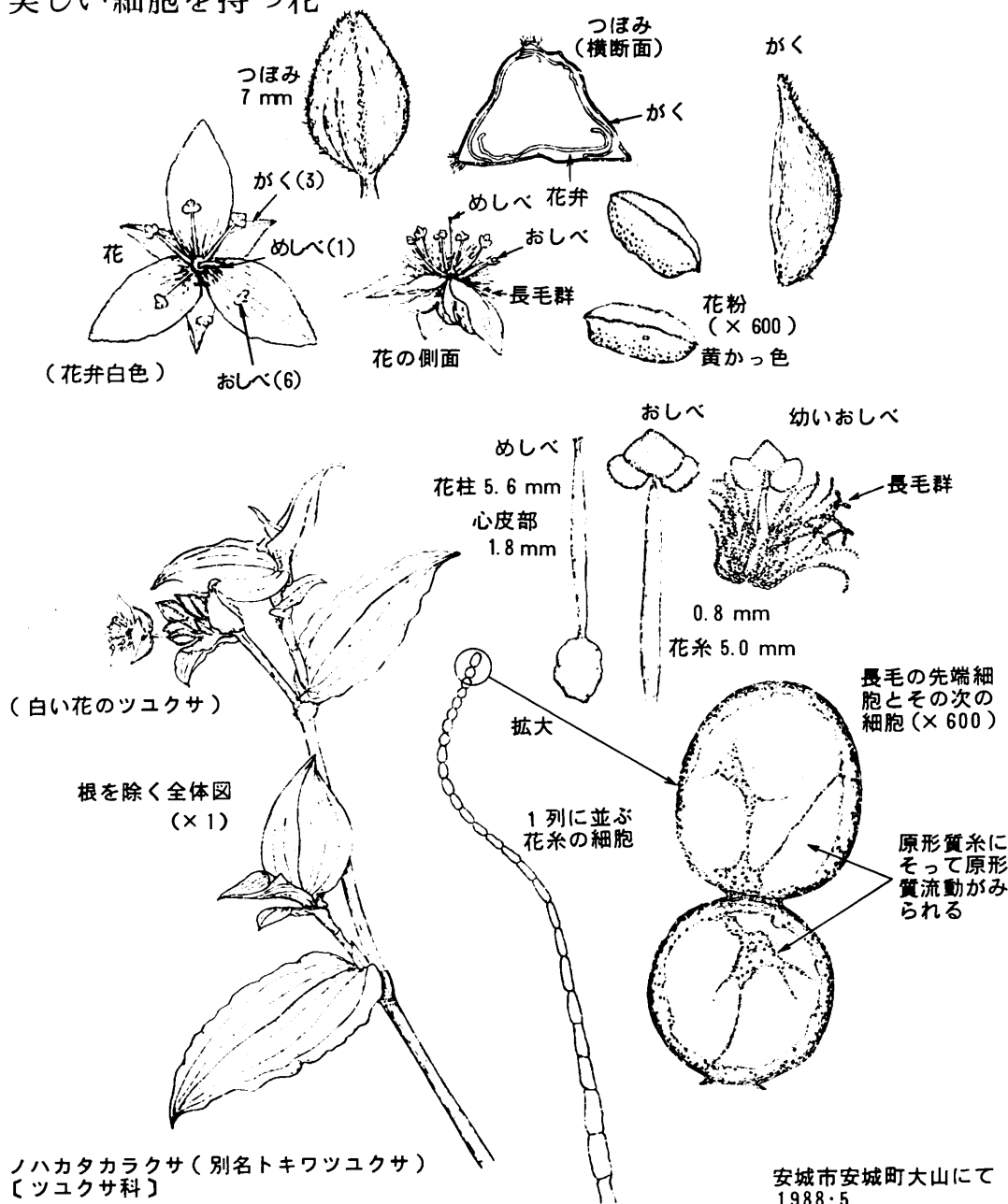
協議会ニュース

25号

愛知県自然観察指導員連絡協議会

平成元年
4月

“美しい細胞を持つ花”



季節の話題

堅香子（かたかご）

「かたかご」はカタクリの古名で、奈良時代の歌集である万葉集にも登場します。

萬葉集卷十九

攀^{かた}折^{かご}堅香子草花^{かたかご}歌一首

物部乃^{ものべの} 八十^{やそと}娼^{あいら}等^ら之^が 搥^{くみ}乱^{がら}

寺井^{てらゐ}之^の於^の乃^の 堅香子^{かたかご}之花^{のはな}

この有名な歌は、大伴家持が「越中の国」今の富山県の県知事に当る職「守」に掛任している時（はっきり言って、これは左遷です）に、詠んだものです。大伴家持は越中の国守の時代に自然を詠んだ優れた歌をたくさん詠んでいますが、左遷の失意を美しい自然が癒したものと思われます。

家持は、この時初めて見たカタクリの花と、井戸で水を汲んでいる華やかな乙女達の姿をイメージ的にだぶらせて詠んだといわれています。ピンク色で外側にピンと反り返った5枚の花弁と中心部の濃い赤紫色、長い花茎の下に2枚あ

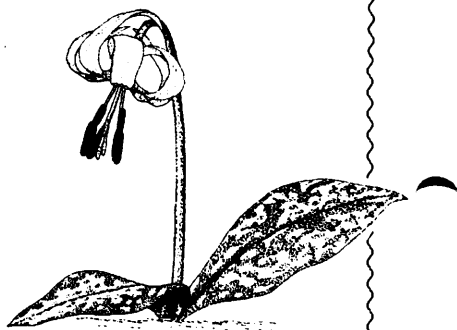
る浅葱色の大きな葉、いかにも若々しく華やかな感じのする花です。

私は昭和 62 年 4 月に新潟県弥彦山麓で初めて裏日本のカタクリ群落を見ましたが、部落のすぐ裏手にある雑木林の林床一面に足の踏み場もない程のカタクリの花が風にゆられていました。

家持がこの歌を詠んだのは西暦でいうと 750 年ですが、そ

の時のカタクリの群落の美しさは、どんなにか素晴らしいものでしょう。

それにしても、人の感じ方は今も昔も変わらないものですね。



（北岡 明彦）

協議会ニュース 25 号目次

- 美しい細胞を持つ花……………（辻 伸夫）…表紙
- 季節の話題 かたかご……………（北岡明彦）… 1
- 表紙のことは……………（辻 伸夫）… 1
- 会員紹介 ⑩ 会計……………（斎竹善行）… 2
- 特集 つつが虫病……………（編集委員会）… 3
- 平成元年度の協議会新役員きまる…………… 6
- マイ・ウォッチング
 - 藤原山系 春の花……………（北岡明彦）… 7
 - 磯でくらす動物の観察……………（山田和男）… 8
- 会員広場……………（永井利幸・北岡由美子・鈴木友之）… 9
- おたよりコーナー……………（長崎義人）… 10
- 支部だより…………… 11
- 協議会行事報告…………… 13
- 行事案内…………… 15
- お知らせ…………… 15

“美しい細胞を持つ花”

ノハカタカラクサ（ツユクサ科）

公園の樹々が深い緑に変わるころ、その林床には白い小花をつけたツユクサの仲間を見つけることができるかも知れません。ツユクサの仲間には食べたり染色の遊びをしたり、花の咲き方・しばみ方の絶妙さ、美しい細胞の配列が見られるものなど、興味深い種類があります。この身近にある草ですが、よく観察すると、花のつくりの美しさ、自然の巧みな生活ぶりに感心させられます。足元にある見なれた花たちを、もう一度ルーペでよく見てみることにしましょう。

（西三河支部 辻 伸夫）

私 と 自 然

齊竹善行（会計）



ありふれた自然の中で
生れ育ったのは、渥美半
島の田舎でした。家から百
メートルも行けば三河湾で、
わずかばかりの平地の田畑
はすぐに段々畑となり、海

抜二百メートル程度の山になるという所でした。
夏の夜にはゲンジボタルが飛び交い、小学校の教室
にミソサザイが入って来たこともある恵まれた
自然条件の中でした。

従って、その頃の私と自然との関わりは、山で
木の実や山菜を採りに野山をめぐり、テングサ採
りに海にもぐるといふ、自然の恵みの享受という
ことが中心でした。そのため、何が食べられるか
ということはよく知っていましたが、当時は鳥な
どを観察するということを教えてくれる人もなく、
私がカワラヒワやムクドリを初めて見た（おそらく
以前から目にはとまっていたのでしょうが、名
前も知らず意識していなかった。）のは、恥しい
話ですが、自然観察指導員になってからのこと
です。いかに、関心を持つことにより物がよく見え
ようになるかを教えられました。

中学生の頃、理科が好きで生物クラブに属して
いました。カエルやカキの卵を使つての発生の観
察が中心でしたが、夏休みには飯田線沿線で合宿
をし、化石や動植物の観察を行いました。ミカワ
バイケイソウとかムカシトンボはその時覚えたも
のです。

中部山岳の自然との出会い

大学に入って名古屋という都市での初めての生
活が始まりましたが、実験やアルバイトに追われ
名古屋の自然に親しんだという記憶はありません。

それでも夏から秋にかけて暇をつくっては北ア
ルプスへ登山というより山歩きに出かけていまし
た。山麓の樹林帯といい、高山植物のお花畑、雪
渓、山頂からの展望、いずれも幼少の頃親しんだ

渥美半島の自然とは異っており、新鮮な印象を受
けました。こうした山歩きでは、ライチョウ・ニ
ホンカモシカやサル等の群に出会ったこともありま
すが、観光地化された場所では人の多さと投げ捨
てられたゴミに驚かされ、美しい山岳の自然を守
ることの難かしさを感じました。

再び身近な自然をみると

就職し、仕事の上で公害・環境問題に携わるこ
ととなり、新たな目で自然と関わらざるを得なく
なりました。

名東区・天白区など名古屋の東部は大規模な宅
地開発で雑木林が市街地に変わり、身近な自然は
大幅に減少してしまいました。しかし、大都市と
はいえ、じっと眺めると公園や社寺の樹林・ため
池・農地・河川・干潟等々ずいぶんいろいろな自
然があります。ただし、量的にはわずかなこれら
残された自然も、民間所有のものを中心に開発の
波にさらされています。

また、渥美の自然についてもかつてと比べると
相当の変化——埋立による海岸の人工化、薪炭利
用の中止による里山の変質、農薬のためか 虫の
減少等々——がみられます。そして、ここでも道
路、リゾート開発と自然への圧力が加わりつつあ
ります。

開発と自然の保全の間で

原体験からもその後の体験からも、自然とのふ
れあいが私達の生活に不可欠なものだという認識
を持っています。それは原生自然に限らず、身近
なありふれた自然であっても同じです。

開発即自然破壊というわけではありませんが、
自然の保全上好ましくない開発であっても、現在
の私有財産制の下では個人の所有する土地やその
上の樹木等の処分を禁止することは困難です。

一人でも多くの人に自然に関心を持ってもらい
自然についてどうあるべきかを考えてもらいたい
と願っています。

つつが虫病

編集委員会

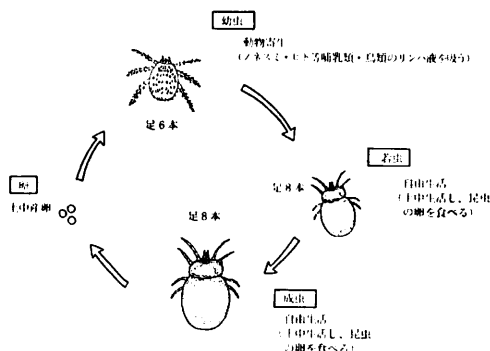
ここ4～5年の間、毎年11月から12にかけてつつが虫病が発生したという記事がしばしば新聞に登場します。今の所、新城市を中心とした狭い地域での発生が多いようですが、私達自然観察指導員にとって無視できない話題ですので、そのメカニズムや愛知県内の発生状況等をまとめてみました。

1 「つつが虫病」とは？

つつが虫病は、古くは秋田・山形・福島等の東北地方の風土病といわれていました。これは、河川流域の川岸のアシ原に夏期発生するアカツツガムシにより媒介される病気でした。しかし、近年では、主に山間部においてフトゲツツガムシやタテツツガムシ等を媒介とする新しい型のつつがむし病が全国的に広がってきました。発生件数で見ると、全国的には54年までは年間100件未満でした。しかし55年から急に増え始め59年の957件をピークに毎年約800件のつつが虫病が発生しています。死亡者も58年に1名、59年に3名、60年に3名、61年は5名と出ています。62年は0でした。

それでは、つつが虫病はどのようなメカニズムで発病するのでしょうか。

この病気は、微生物の仲間のリケッチアが病原体ですが、このリケッチアはダニの仲間のツツガムシの体内に生息しています。そのうち幼虫のツツガムシだけがノネズミやヒト等の哺乳類に寄生



ツツガムシの生活サイクル

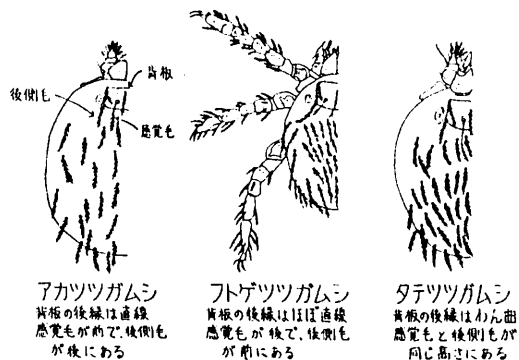
生活を送り、若虫と成虫は自由生活を送り昆虫類の卵を食べます。ツツガムシ自体は移動力に乏しいため、ノネズミが分布を拡げているといわれています。ツツガムシの体内で生活していたリケッチアは、幼虫の吸血時にヒトの体内に入り、やがて発病に至ります。一般に傷口は小さく見つけにくく、痛みもほとんどありません。しかし、感染した場合には一週間程で傷口がうみ、リンパ腺が腫れ、約2週間の潜伏期間の後、高熱が出て、数日後に全身に発疹が出ます。ツツガムシの種類によっては症状が軽く軽くすむ場合もありますが、風邪の症状と間違えやすいという難点があります。

治療には、クロラムフェニコールやテトラサイクリン系の抗生物質が効果的で、安静にしていれば治りますが、前述のように手遅れとなった例もあります。

このように、微生物（リケッチア）とダニ（ツツガムシ）と哺乳類（ノネズミ類とヒト）を結ぶ自然の巧妙な仕組みで、つつがむし病が発生するのです。

2 愛知県におけるつつが虫病の発生状況

愛知県の過去のつつが虫病は昭和41年に名古屋市中で1件発生して以来、累計で68例が記録されています。特に昭和57年以降は新城市を中心として毎年記録され、増加傾向にあるのが懸念されます。発生が確認された場所を地域別に分けると、次の



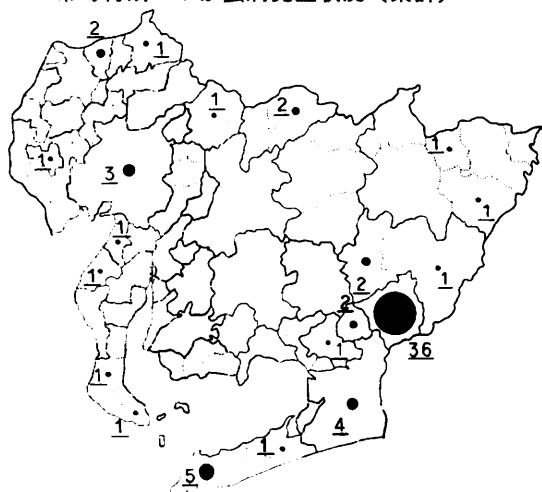
リケッチアを媒介するダニの分類法

つつが虫病の地域別発生状況

年度	県計	地域別発生数						
		名古屋	尾張	知多	豊田	北設楽	新城	東三河
41	1	1						
46	1	1						1
57	1							
58	4		1				1	2
59	5		1	1	1		2	
60	11		2			1	7	1
61	16			1		1	11	3
62	19		1	1			14	3
63	10	1		1	1		4	3
累計	68	3	5	4	2	2	39	13

(注) 尾張には海部郡を含む

市町村別つつが虫病発生状況(累計)



ようになります。

図表のとおり地域的に大きな片寄りがあり、新城市だけで全体の53%、豊川流域と渥美半島を含めた地域では全体の76%にも及びます。その原因は今のところ全くわかっていませんが、愛知県ではこれらの地域が危険地帯といえましょう。

しかし、ツツガムシ病の症状発現はツツガムシに刺されてから相当時間の経過後となりますので、刺された場所を特定するのが困難です。三河地域ではほとんどが地元地域での被害のようですが、名古屋・尾張地区の発生者は、鈴鹿山系等地域で感染した模様です。

次にツツガムシに刺された原因を調べると、山芋堀り・松茸狩り・農作業・山林作業・庭の手入れ・草刈り・ジョギング等があげられています。私達の自然観察活動で通常行う行動も要注意といえそうです。特に土壌動物のハンドソーティングによる観察などは危険度が高いと思われます。

また、ツツガムシによる刺口の部位を区分すると下表のようになり、足が最も危険です。ツツガムシ幼虫の行動様式から当然のことと思われます。

ツツガムシの刺口部位

頭	胸	腹	鼠径	腎	腕	足	不明	合計
4	9	10	2	1	12	25	5	68

県内での68例は、全て医師から報告されたものですが、症状は発熱・発疹・リンパ節腫脹・筋肉病・筋腫脹・発赤・頭痛・肝腫・肝機能障害・全身倦怠が記録されています。特に高熱が目立ち、38.0℃～40.0℃に及んでいます。入院も46例あり、その率は68%に達します。発病して医師に確認された時期は、4月2例、5月1例、6月1例、7月1例、8月1例、10月6例、11月45例、12月9例、不明が2例あり、10月から12月までの3ヶ月間で実に88%に達します。晩秋から秋冬にかけてが最も危険な時期といえそうです。

最後に感

染者68名の年齢別・男女別構成を表にしてみました。女性より男性、若者より老人に被害が多いのは農林作業・

年齢	男性	女性	合計
0～9	1	0	1
10～19	1	0	1
20～29	2	0	2
30～39	5	1	6
40～49	9	6	15
50～59	14	6	20
60～69	11	2	13
70～79	4	2	6
80～89	1	1	2
合計	48	18	66

(注) 他に不明2名

庭作業をす

る割合が、

感染者の年齢別・男女別構成

比較的高齢の男性に多いことに起因していると思われます。

まだまだ謎が多く、決定的な防御方法がないのが実状のようです。

3 つつが虫病リケッチアの分布について

愛知県衛生部ではこうした「つつがむし病」が増加傾向にあるのに対応して、昭和58年度から毎年1～2か所の保健所でつつが虫病リケッチア分布調査をしてきました。これは、ノネズミを捕獲して、寄生するツツガムシの同定及びつつが虫病の原因となるリケッチアの保有状況を調査したものです。

年度	調査対象 地 区	調 査 結 果		
		捕獲鼠数	ツツガムシ 採 取 数	リケッチア 分離鼠数
58	足助保健所	85	7種 7,747匹	13頭 (15%)
	設楽保健所	68	10種 1,857匹	4頭 (6%)
59	"	63	11種 4,743匹	0頭 (0%)
60	"	51	10種 2,673匹	8頭 (16%)
	新城保健所	4	7種 611匹	0頭 (0%)
61	"	7	5種 2,289匹	0頭 (0%)
62	"	43	9種 9,272匹	11頭 (26%)

つつが虫病リケッチア分布調査結果

このうち、60・61年度の新城保健所管内の調査はネズミの捕獲数が少ないため参考にはならないと思われませんが、62年度同管内のリケッチア保有率26%はさすが高率となっており、十分うなずけます。

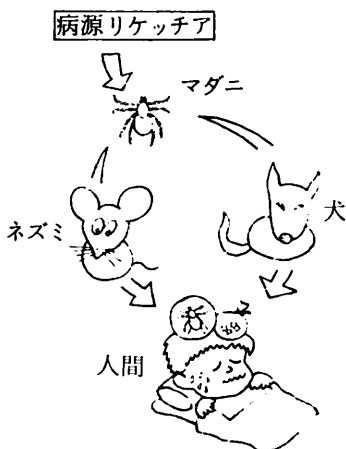
こういった調査を全県的に実施してもらえれば、危険地域の予測や今後の動向等についての良い指標になることでしょう。

4 新しいダニ媒介病「紅斑熱リケッチア症」

去る3月27日の中日新聞夕刊に、マダニが媒介し、つつが虫病に症状が似ている（40度前後の高熱と赤い発疹が特徴）新しい感染症「紅斑熱リケッチア症」が全国に広がりつつあるという記事が掲載されました。この病気は日本では5年前に初めて確認され、これまで四国や九州など一部の地域でしか発生していなかったのが、今後全国各地で発生する可能性があるということです。

このリケッチアはヤマトマダニなど8種類のマダニから検出されており、ノネズミ類や犬・牛など哺乳類が

媒介となります。また、北海道・福島・福井・徳島の4県で山林仕事をする人を中心に約五百人の血液を採取し、このリケッチアの抗体



保有率を調べたところ、4地域すべてで平均10%の人が感染していたとの結果が出ています。

この病気は抗生物質の投与で100%治るが、処置が遅れれば、稀に死亡することがあるそうです。

以上のように、つつが虫病とは感染形態・症状・治療法等非常によく似ています。私達にとっては、またひとつ頭痛の種が増えたといえそうです。

5 自然観察指導員とダニ媒介感染症

自然観察指導員の皆さんは、一般の人に比べて野山を歩く機会がかなり多いはずですが、つつが虫病にかかった話は聞かませんので、これにかかるのは運が悪いとしか言い様がありません。

しかし、自分自身のためにも、自然観察会で参加者等から質問が出た時に適切な回答をするためにも、つつが虫の発生メカニズム・現状・対策等を知っておく必要があります。

次に一般的な予防措置をあげると、次のようなものがあります。

- ① 幼虫の発生時期に危険地域への出入りをできるだけ少なくする。
- ② 長そで・長ズボン・長靴・手袋を着用し、さらにそで口を縛り、虫の侵入を防ぐ。
- ③ 市販の虫忌避剤（ジェチルトアミドなど）を衣服・靴・露出部に塗る。
- ④ 山林から出たら服を着換え、ダニが体に付着していないか確認する。

③の忌避剤は効果的だそうですし、④の眼による確認は大型のマダニ類には効果的です。しかし、②の効果はダニの侵入に関してははなはだ疑問に感じますし、私達自然観察指導員の活動においては、落葉や土を触ったりすることを避けることはできません。また、ゴム手袋をはめて、土壌動物を観察する指導員というのは不気味な感じがします。

すべてを運にまかせて、うつがなきよう祈るのが一番効果的かもしれません。

なお、今回の原稿作成にあたり愛知県衛生部から貴重な資料を利用させていただきましたことを感謝いたします。

<参考資料>

日本ダニ類図鑑（江原昭三編）全国農村教育協会
野外における危険な動物（自然保護協会）思索社

今年度の協議会と各支部の役員等が次のとおりきました。

会員の皆さんで、役員を御支援下さるようお願いします。

平成元年度協議会役員等名簿

【役 員】

○会長；大竹 勝 ○副会長；竹内哲也・中西 正 ○監事；水鳥富人・岩崎龍生
○理事； ・佐藤国彦・渡並喜一郎・松尾 初・北岡明彦・浅井聡司・山田博一・加藤寿芽・三津井宏・武田孝夫・石川静雄

【運営委員会】

○委員長；佐藤国彦 ○副委員長；北岡明彦
○委員；神戸 敦・国枝利満・佐野 滋・水野利彦・斎藤成人・長崎義人・相羽福松・水野利捷・白井洋二・藤原優年

【編集委員会】

○委員長；渡並喜一郎 ○副委員長；北岡明彦
○委員；橋本 哲・永井利幸・布目 均・長尾 智・菊地今朝和・浅野真理・武田孝夫・横山良哲

【ブナ科樹木調査委員会】

○委員長；松尾 初
○委員；相羽福松・伊東仙治郎・大谷敏和・岡田 速・岡田慶範・加納貞夫・北岡明彦・熊谷尚久・佐藤国彦・竹内哲也・武田 篤・日比野修・安井貞夫

【水生昆虫分布調査委員会】

○委員長；北岡明彦
○委員；大竹 勝・榊原 薫・鈴木 久・中島芳彦・長尾 智・早川博康・平井直人・藤原優年・三田 孝・村上和彦

【四季の自然観察作成委員会】

○委員長；大竹 勝 ○副委員長；北岡明彦 ○幹事；佐藤国彦
○春編部会長；佐藤国彦 ○夏編部会長；水野利彦 ○秋編部会長；水鳥富人
○冬編部会長；松尾 初

【支部役員】

○名古屋支部	(代表) 浅井聡司	(会 計) 増田 武
○尾 張 支 部	(代表) 山田博一	(会 計) 伏屋 光信
○知 多 支 部	(代表) 加藤寿芽	(幹 事) 降幡 光宏
○西三河支部	(代表) 三津井宏	(副代表) 宮本敬之助
	(幹事) 水鳥富人・岡田慶範・浅野真理	
○東三河支部	(代表) 武田孝夫	(幹 事) 鈴木 友之
○奥三河支部	(代表) 石川静雄	(副代表) 杉山 茂

参考……協議会3役(会長・副会長及び監事)は任期3年で、平成2年度が改選となります。

藤原山系 春の花

尾張支部 北岡明彦

高校1年の5月に生物部の合宿で初めて登って以来、藤原岳の春の花に完全に魅せられてしまいました。もう18回も登ったことになります。



なぜ、そんなにも藤原山系の花が素晴らしいのかというと、ひとくちに言えば、石灰岩が露出した山だからです。石灰岩が融けた水はアルカリ性となり、薄い土壌・露出

する岩石とともに高木層の発達を阻害します。また、春のかわいらしい草花は温帯性起源のものが多く、その意味でも1,120mの藤原岳の標高は適当です。最後に忘れてならないのは、交通の不便さです。麓から山頂まで全部自分の足で歩く必要のある事が、藤原岳を花の山に保っている最大の要因かも知れません。

登山コースは、ゆっくり花を見るなら坂本谷コースを推奨します。三岐鉄道西藤原駅から坂本谷人口まで20分の行程が少々余分ですが、そこから先は、息をつく間もない程の花との対面が続きます。坂本谷は、石灰岩の露出する水のない沢を登りますから、少々体力が必要ですが、それだけ登山者は少なく、静かに花と対話できるのも特徴です。

ゴールデンウィーク頃が最も華やかな季節で、62年5月3日の記録帳には30種の花の名前が書きこんでありました。毎年同じ日に登っても、



ニリンソウの群落美

その年の気象（特に積雪）によって花暦が半月以上も変化します。毎年違った花が見られるという訳です。

春に見られる花から敢えてベスト3を選ぶとしたら………実に難しいけど、ずばりこれですノ

- まずは、万人の好むカタクリ……この美しさは説明を要しません。（季節の話題参照）
- 次には、ニリンソウ……この圧倒的な群落美こそ、山の春そのものです。
- 私の好みでいうなら断然、コバイモ……華やかさを競い合う春の花々の中で、ひっそり咲いています。



私の最も好きな花 コバイモ（ユリ科）

その他、本当に多くの花が見られますが、いくつか変わったものを紹介しましょう。

①タキミチャルメルソウ（ユキノシタ科）は、藤原岳山麓にある鳴滝で最初に発見されたものです。一般にチャルメルソウ類は溪流沿いで見られますが、この種は尾根近くでも生活できる変わり者です。

②ルイヨウボタン（メギ科）は、北米大陸と東アジアだけに隔離して分布する植物群に属し、何ともいえない独特のムードを持った花が、何故か気になります。

③スハマソウ（キンポウゲ科）は、藤原岳では白花ばかりです。ところが昨年訪れた広島県北部の石灰岩地帯ではピンクの花ばかり、同じ植物でも、地域によりこんな違いもあるのです。

こうした各々の植物の由来や生活を知ると、ますます植物達が近く感じられます。野山へ出かける前や出かけた後には、図鑑でこうしたことを調べるクセをつけましょう。

磯でくらす動物の観察

知多支部 山田和男

知多支部では、県委託の自然観察会を毎年美浜町の富具岬で行っており、その際にいろいろな海岸動物を参加者と一緒に観察してきました。

その中でも、特に親しみ深い動物を2種類紹介しましょう。

① アメフラシ (Anaspidea sp.)

特徴は次のとおり。

- 色は黒褐色
- まだら模様
- 呼吸はえら呼吸
- 体表に多量の粘液
- 潮だまりを好む
- 性は雌雄同体
- 緑藻類のアオサ類を好んで食べる。

外観はグロテスクですが、なんとも言えない愛敬者です。

春先から初夏にかけて、繁殖のため即席ラーメンのような卵塊（黄色～淡赤色）を海藻の間に産みつけます。孵化した幼生は半年程で10cmくらいに成長し、親は産卵後に死亡します。

また、触った刺激などで興奮すると紫色の分泌液を出し煙幕を張りますが、無毒ですし染まることもありません。さらに、体には多量の粘液を分泌し、波にもまれても岩に触れても、傷がつかないようになっています。

② ヨロイソギンチャク

(Antopleura Japonica)

本州をはじめ四国や九州などの沿岸で極く普通に見られる種類です。体高4～7cm、体幅4～7cmの中型のイソギンチャクで、体壁部に疣状の吸盤を持ち、そこに砂粒や貝殻の破片を付着させて

いるため、この名前がついたようです。

イソギン

チャクの捕食手段は、

触手を使うことです。

この触手の表面には無数の毒矢を

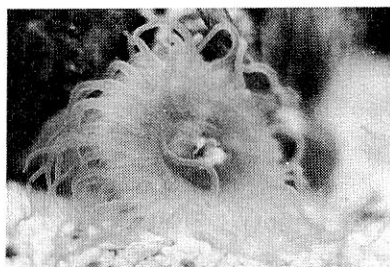
収めており、

ヨロイソギンチャク

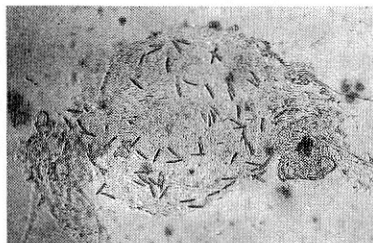
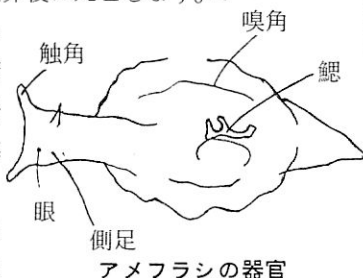
物理的・化学的を問わず刺激に対し反射して獲物を麻痺させてしまいます。そして、中央にある口へ体を変形させて運び食べます。（毒矢は、刺胞と呼ばれるカプセルに入っている）

よく、イソギンチャクを指で触てみると、何か張り付くような感じを受けるのは、この刺胞の中から毒矢（刺）とともに刺糸が飛び出し、指に刺さったのです。

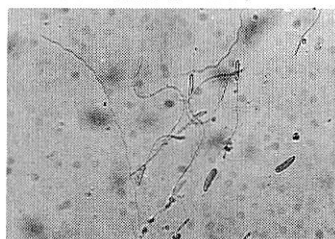
下の写真Aは、触手にスライドガラスを付着させ顕微鏡観察したのですが、かなりの刺胞が点在するのがわかります。



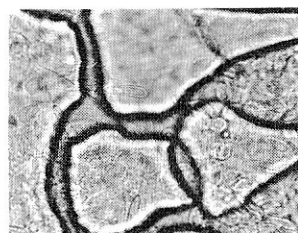
観察会の人気者アメフラシ



A 刺胞 (×75)



B 刺胞 (×125)



C 魚に刺さる刺胞

写真BはAを125倍に拡大したもので刺胞と刺糸がよくわかります。

写真Cは、小魚をイソギンチャクに付着させた後に、その魚の鱗を1枚取り検鏡したものです。鱗のほんの一部しか写っていませんが、刺胞から発射された刺が、鱗に刺さっている様子が観察できます。

このように顕微鏡で、自然界のメカニズムを観察するのも、大変楽しいものです。



自然環境に関するデータの不足について

(名古屋支部 永井利幸)

内需拡大の掛け声とともに、愛知県でも大規模開発の計画がめじろ押しとなっていますが、いっぽうでは、自然破壊を危ぐする声も少なからずあります。そこで問題解決の手段として環境アセスメントが重要となっています。ところが、肝心の自然環境に関するデータは、見るべきものがひじょうに限られています。その結果、事業者にとっては、環境アセスメントのコストが割高なものとなっており負担感が増幅されているいっぽう、自然を愛する者のフラストレーションも同じように高まっているという現状があります。

このような現状を解消するためには、例えば自然史博物館や県の自然保護課のような公的部門でしっかりとしたデータを体系的に蓄積して、広く一般の利用に供する体制を整えておくのが最も望ましい姿だと考えますが、諸般の事情により、このような事態が解決されるには、今なお時間がかかる見込みです。そこで期待されるのが、当協議会における各種調査活動です。北岡明彦氏の言葉を借りると、「本県内で自然環境に関する基礎的な調査を行ないうる団体としては、調査員(われわれ会員のことです)の数その他調査体制において、当協議会は、トップレベル」だそうです。現在、普通種の分布を中心に調査活動が展開されていますが、地域の自然を持続的に保全するためには、貴重種ではなく、われわれの身近にあり、地域の骨格を形成する普通種の保全がカギとなると思いますが、小生が自然保護課で得た経験からしても普通種はおろか貴重種の保全にさえ、その理解を求めるのはたいへんなことで、科学的な裏付け無しにはできません。

現在進行しているブナ科植物分布調査をはじめ、基礎的かつ応用範囲の広い調査で会員の幅広い協力を得て十分な成果が得られるならば、本県の自然環境の保全のため当協議会は大きく貢献することができると思います。

カワセミ観察に夢中

(尾張支部 北岡由美子)

瀬戸市定光寺の正伝池(ボート池)のカワセミ観察を始めて、ほぼ1年。

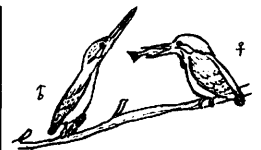
最初は自然歩道をぶらぶら歩き、きれいなカワセミを見て楽しもうとぐらいにしか思っていませんでしたが、プロミナーで有名なる?求愛給餌の瞬間を見てしまったから、もう夢中です。♂が魚をくわえていつもの枯れ枝に止まるや否や♀が現われ、2羽でひっぱりあいをした後、♀が魚を食べる一連の動作のかわいい事、この上なしです。週1回を定例とし、同会員の山田果与乃さんと共に、雨ニモマケズ、風ニモマケズ?の日々です。♂が♀の所へ来る際にチーチーとそれはそれは甘い声で鳴く様子、求愛飛翔、嘴と嘴でチャンバラをするような「なわばり争い」、ペリットの確認、餌はスジエビ・オイカワ・ヨシノボリ・ヤゴ・タイコウチ等である事など、1年のうちにいろいろ観察できました。しかし巣穴がまだみつからない事等、まだまだわからないことが一杯です。また、今年は一時♂2♀1となり、その前後の行動からどうも先住の♂が追い出されて略奪結婚が成立したようにも思われ、この次はどんなドラマが……と思うと、興味はつきません。

一方、定光寺のシイ・カシの森は行く度に新しい発見や違った顔を見せてくれます。その豊かさを思いつつ、いつまでも……と思わずにはいられません。

今後、正伝池以外でのカワセミの比較観察もやってみたいと思いますので、カワセミに興味のある方や情報をお持ちの方は御連絡下さい。

(TEL) 0561-84-2953

予定者の柳川さんと連絡がとれませんでしたので、ピンチヒッターの登場となりました。



見直そう、身近かにある 小さな自然

(東三河支部 鈴木友之)

我が家は国道一号線沿いに在り、昔は東海道として立派な松並木が道路の両側に続いており、緑にも恵まれていました。昭和30年代に入り交通量の増加に伴って車道拡張工事のために松並木は伐倒され、新設された歩道に街路樹として植えられたイチョウの若木が唯一の緑となったが、それも程なく、再度の車道改良工事で歩道が縮小され、イチョウも消え、地肌はどこにも見られなくなった。

緑恋しさに鉢植えの草花を軒下に置くが、排気ガスの影響か正常な開花は望めなかった。

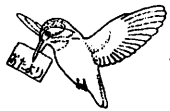
軒下はコンクリートで塗り固められた歩道と接している、その接点に緑の芽生えが発見されて久しいが、今では、その接点9mが緑の帯となっている、緑の帯の主たちを紹介してみます。

アカミタンポポ…6株、スマレの一種(園芸種の野生化したもの)…10株、が目立つ。カタバミ、オヒシバ、不明種…若干と、夏から秋の頃になると必らず姿を見せる。ヒメマツバボタンなどが常

連客である。盛夏の頃の地面は60℃にも達しようかと思われる暑さのため、日中はアリの活動も途絶える。こんな悪条件下でも定着して生き続ける雑草たちに愛着を感じるのです。

浅学な私には数多くのことを教えてくれます。早春の頃花をつけたスマレは、夏から秋にかけ、結実を続ける不思議、閉鎖花で自家受粉などを知るのに2ケ年を要したこと。マツバボタンの発育不良ぐらいに思っていたヒメマツバボタンのことなど。最近の感激は、セイヨウタンポポの仲間のアカミタンポポです。株間に顔を出した、花のつぼみは数日で開花となるが、花の終わってからの変化、花茎が斜立から横になって寝てしまったり、頭だけ持ち上げたり、結実すると茎は直立して急速に伸び、実を飛散させ終わると程なく横倒しとなって枯れる。この一連の変化、見事との言葉を贈りたい。何も無いと思われる環境下にも、素晴らしい自然観察の場があることを知りました。

次回のリレー投稿は、降幡光宏(知多)、藤原優年(奥三河)、鈴木利久(奥三河)の各氏にお願いします。(原稿〆切は5月30日です。)



おたよりコーナー

雪上観察会に参加して (尾張支部 長崎義人)

去る3月25・26日、自然保護協会等の主催で裏磐梯朝日国定公園で行われた雪上観察会に参加しました。宿舎の国民休暇村周辺は、ブナやミズナラ等の落葉樹林がほとんどで、一面の銀世界が広がっていました。

第1日目は午後2時頃から宿舎周辺で観察しましたが、猛烈な吹雪で雪国の冬の厳しさを実感しました。その中でマンサクやショウジョウバカマの花を見つけた時には、参加者全員歓声をあげました。この地方のマンサクは葉の形や花が、愛知県のマンサクと違い、マルバマンサクと呼ばれています。ショウジョウバカマも花茎が短いものでした。このように、多雪地と少雪地の植物の違いは、大変興味深いものです。

翌日は、五色沼を巡りました。昨夜の雪から一転して快晴に恵まれました。この日のメイン

は、新雪の上に残された動物達の活動跡を見ることです。リスやウサギの足跡が至る所に残され、ホオノキやタラノキの皮をかじった跡、雪上にお菓子のように残された「糞」も観察できました。このように雪の上に残された痕跡を辿っていけば、動物達の夜の行動が手にとるように想像することができます。

ウサギの足跡、前はどっち？



歩くクロスカントリースキーは初めての経験でしたが、意外に簡単に使いこなすことができました。これなら、山を削ったり、スノーマシンやリフトなどの特別な施設を必要としません。自然の状態をそのまま保ちながらスキーを楽しむことができます。このような、歩くクロスカントリースキーの愛好者が増えることは、自然を破壊することなく、雪国の経済を潤すことにつながるのではないのでしょうか。

支部だより



名古屋支部

2月5日(日) 支部総会 愛知県産業貿易館

支部総会では、まず、63年度の活動報告があり、

①自然観察会 ②研修会等 ③例会の順に内容・参加人員・観察会の宣伝方法についてなどの発表がありました。自然観察会では最低7名から最高63名までの参加者の幅があり、その各々についてどんな広報を行ったかについて、今後の活動の参考に話し合いました。

次に、本年度の支部役員の選出に入りましたが、名古屋支部では、多くの人に役員を経験してもらうため原則として1年で交替するという慣習があり支部長に浅井聡司さんを選び、会計に増田さん、運営委員に斉藤さん、佐野さん、国枝さんをそれぞれ選出しました。例会担当はベテランの福西さんをお願いしました。その後、新役員を中心にして、新年度の活動予定を討議して決定をみました。最後に記念講演として、中部リサイクル運動市民の会の舟橋 博さんを招き、『私たちの生活を問い直す』— 環境と廃棄物 — と題して、自然を守るということを私達の逆からみて、ゴミを出さない、リサイクルして有効利用という活動を中心とした幅広い活動の話を聞きました。

総会から約1ヶ月、すっかり暖かくなり、3月18日第1回の例会、26日(日)猪高緑地自然観察会、5月14日(日)相生山自然観察会に向けて4月16日(日)、4月30日(日)下見とエンジンがかかってきました。会長自から発行するNAGOY支部だよりは、ユニークな会員紹介から始まり、なんじゃもんじゃ通信の季節ごよみも入れもう3号も発行されました。(布目 均)

尾張支部

2月12日(日) 支部観察会 瀬戸市定光寺

きょうのテーマは「越冬昆虫」。朽木を壊して潜んでいる昆虫を見つけ出すのは、宝さがしのようなおもしろさがある。参加人数は10名程度。

定光寺の裏の林には、巻き枯しによる朽木が何

本もある。長崎さんのアイゼンが威力を発揮した。コカブトムシ♂・ミツノゴミムシダマシ・ナガニジゴミムシダマシ・クサギカメムシそれにキマワリ体全体がキチン質で覆われている。



の幼虫多数が発掘された。おもしろい形や美しい色彩に

喚声をあげながら観察した。

3月11日(土)には有志の手でオオゴキブリも発見されました。

3月12日(日) 支部観察会 犬山市善師野

参加者11名は、カワセミのラブコールを聴きながら、いつものコースを進んだ。

テーマは「冬芽」であったが、暖冬のため、ミヤマガマズミ・アオキなどの冬芽はすでに半開きになってしまっていた。

昆虫も例年より出現時期が早いようで、ミヤマセセリ・ルリタテハ・テングチョウ・モンキチョウ・キチョウ・モンシロチョウ・イカリモンガ・ビロードツリアブの飛ぶ姿が見られた。

道端には、ノジスミレ・ナガバノタチツボスミレが咲き誇り、もうすっかり春の風情でした。

新しい発見としては、大洞池の北岸にショウジョウバカマの大群落を見つけました。何度も歩いている道ですが、まだまだ新しい発見があります。これこそ、自然観察の楽しみです。(長尾 智)

尾張支部から他支部の皆さんにPR!

尾張支部では毎月第2日曜日を月例観察会とし、フィールドに出ています。本年度は地元から6か所の優れた自然観察地を選び、年2回ずつ訪れます。4・10月が瀬戸市定光寺、5月と11月は犬山市八曾溪谷、6月と12月は春日井市内津神社、7月と1月は犬山市継鹿尾などとなっています。

「郷土の優れた自然を見直そう」を基本に毎回テーマを設けて、楽しさと勉強を兼ねての観察を行いますので、他の支部の皆さんも是非一度参加してみてください。詳細は支部長の山田博一さんまで。(TEL0568-77-2154)

知 多 支 部

1月29日 支部総会 東海市農業センター

10時から第8回総会が開催された。参加者は11名であった。まず、加藤会長より、構成会員の面や行事消化面、運営面での現状を「充実してきた反面、マンネリ化して来た」と触れ、最後に「自分自身楽しみ、そのことで会を盛り上げてゆこう」とのあいさつがあった。その後、恒例により降旗さんと榊原さんの主導で、前年度の行事報告等を主観と客観を交雑させながらも反省ポイントに主眼を置き、一気に討議。

全体的に見て、一件のみ講師の都合で中止になったものの、野外、室内研修含め24件のスケジュールをそつなく消化したということは、一見知多支部の力量を現わす数値と見られそうだが、一件一件の参加率を見ると、低い上にバラツキが大きく、そのことから一部の熱心な会員におんぶされている現実がみえてくる。なにはともあれ総会は楽しい。両主導の小気味のいいバツバツの交通整理。機を得た相羽さんの合いの手。山口、野末両婦人会員の謙譲なる配慮。それにも増して伝統あるアルコール付昼食は午後からの議論を円滑にしてくれる。昼食時、昨年11月奥三河(段戸山)での研修山行の折り撮映したビデオを放映、回覧写真と同様に好評であった。以降、アンケート等を基にした89年度案を討議、一般募集を含めた野外研修15件、室外・夜間研修10件及び、支部、県の係り分担を決め13時30分散会した。

(菊池 今朝和)

西 三 河 支 部

1月20日(土) 支部総会 豊田市鞍ヶ池ロッジ

前日が雨だったので早朝の最低気温は6.2℃と高かったが、日中は晴れて北西の強風が吹き荒れた。午後4時からの総会には17名(内4名は遅刻、全支部会員数は42名)が参加した。三津井支部長を囲んで、昭和63年度事業報告・会計報告;平成元年度役員役割分担・事業計画・予算案を了承した。そして、今回は『一言でもいい、何か全員が教え合おう』日頃愛用している書、大切に愛蔵している本、皆に自慢したい文書などを紹介しよう

ノ日常使用している図鑑の長所の説明とか、この本は無料でもらえるよとか、月々来るパンフレット等の整理方法とかを紹介しよう』という呼びかけで……利尻島パンフレット(宮本)、人を中心にした生物授業ノート(三津井)など。夕食後は、大内秀之さんから『鞍ヶ池の野鳥』一羽一羽一種一種についてスライドで講義を受けた。

翌朝、ロッジ周辺の観察でヤマガラ・コゲラ・シロハラ・エナガ・ヒヨドリ・ホオジロ・メジロ等の実際の観察に、昨夜の講義が大変役に立った。

(水鳥富人)

東 三 河 支 部

1月22日(日) 支部総会 西武デパート

会員19名の出席で、シャンシャンの拍手ならぬ真剣な討議で議案を議決。

本年度の役員・行事担当者は次の皆さんと決定。支部長に武田孝夫、副支部長に中島芳彦、会計に山本久美子、監事に丸山嵩、事務局長に鈴木友之、A班長に神戸敦、B班長に高橋康夫、C班長に間瀬美子、研修班長に三田孝、県委託観察会担当に中西正の方々です。

行事としての観察会は4月30日伊古部海岸(県委託)、6月4日豊橋公園、7月16日豊川江島橋周辺、11月23日岩屋山と決まり、特に本年は会員相互の研修会を6回計画。

3月26日(日) ブナ科樹木研修会 豊川市財賀寺

協議会事業のブナ科樹木分布調査に広く会員に協力してもらうため計画したもので、会員8名の出席。葉の形、ドングリの形を図鑑と首引きで、このシイは何だろう?このカシは何だろう?と楽しく議論しながら勉強できたのが大きな収穫。

全山のマツが松くい虫の被害を受けており、その多さに驚き、この時期にギンリョウソウが見られた暖冬異変にも驚きました。(武田孝夫)



ヒメマイマイカブリ

名古屋支部
渡並喜一郎

協議会行事報告

総会 3月5日(日)

平成元年度通常総会は、会員約50名が出席して、名古屋市中区栄の愛知県青年会館で開催されました。当日は、名古屋市内で行なわれた女子マラソンの交通規制にかかって開会時刻に遅れる人もあり、約30分程遅れて始まりました。最初に、昭和63年度事業報告及び同決算報告、次いで平成元年度事業計画及び同収支予算について、それぞれ報告・説明がなされ、いずれも承認されました。

平成元年度の事業の主な内容は次の通りです。

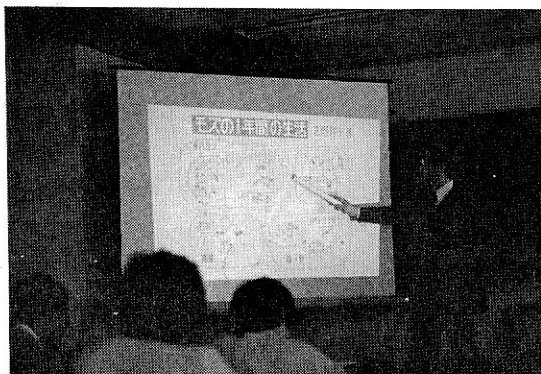
- * 県委託自然観察会(6か所)を始めとする各種自然観察会の実施。
- * 研修会として土壌生物研修、樹木の分類研修、指導員研修等を行う。
- * 調査事業として、63年度に引き続き、ブナ科の樹木分布調査、水生昆虫分布調査、哺乳類分布調査を行う。
- * 県からの委託事業として、「四季の自然観察の手引」を作成する。今年度は春編をまとめる。
- * 県の行う自然観察指導員講習会に協力する。

とき 9月15～17日

ところ 愛知県民の森(鳳来町)

なお、提出議案に関連して、本協議会が各種調査を行うのはなぜかとの質問が出されました。それに対する答の要旨は次のとおりです。

県内の自然環境の各種要素の分布データは主要な動植物を始めとして、ほとんど整備されていない。そのため、植物については、一般的にデータを取りまとめやすいブナ科の植物について、県内1kmメッシュの分布図の作成を始めた。



水生昆虫の分布調査は、ブナ科植物の分布調査と多少観点は異なるが、県内の各種河川等における現時点での水質状況をできる限り把握しておこうとするもの。

こうしたデーターは今後時が経つ程生きてくるものと思われる。また、こうした調査結果は、自然観察会を行うに際しても生きてくるものであり、また、本県の自然の特質を具体的に把握し、地域に見合った指導を行ってゆく上でも必要なことと考えられる。

総会の後、「鳥類による生物指標」及び「モズの生態」について大阪市立大学の山岸哲先生の講演がありました。スライドを使っての分かりやすい説明と話のおもしろさに大変好評でした。

鳥類をとおして環境を知るにも、(1)高度・季節を知る。(2)自然度を知る。(3)環境の変化を知る。に大別される。

(1)や(2)については、高度や季節あるいは自然度を知るのに、わざわざ判別の難しい鳥によるよりも気圧計や植生の変化、当該地の周囲の状況を端的に見るほうが、容易であり正確であること。

(3)は、例えばカワセミの分布のように過去の分布の変化をとおして環境の変化を知ろうとするものであるが、最近では、カワセミが増えてきたという報告もありこの関係付けは、容易ではない。

以上結論として、生物指標に鳥を使うことは難しいということでした。

「モズの生態」は、先生の現在の研究テーマだけあって内容は斬新なものでした。時間の関係ではほんのサワリだけの紹介でしたが、今度はこれをテーマに聞きたいと思いました。(橋本 哲)

運営委員会 3月18日(土)

産業貿易館で、7名の委員により今年第1回の運営委員会が行われました。

始めに、運営委員会の年間計画と役割分担を定めました。主な仕事としては、各種行事の計画と実施、自然観察会実施マニュアルの作成、森林の調査法の検討などです。また、今年度から事務局の仕事を運営委員会で行うこととなりましたが、

その役割分担としては、事務総括：佐藤、事業総括：北岡、経理：斎竹、総会等の事務と広報：国枝、会員関係：佐野、は乳類調査：神戸、その他の委員は研修会等の実施を分担することとなりました。

次に、自然観察会の実施に際して、①広報に力を入れること、②なるべく具体的なテーマを設けること、③テキストには引用資料名を必ず書くことなどを各支部へ通知することとしました。

また、会の性格から一般会員の盛り上りに欠けるため、観察会・研修・調査等に会員が出やすいように工夫すべきなどの意見も出されました。

土壌生物研修会（第2回） 3月21日

豊田市の鞍ヶ池ロッジで16名の参加により実施しました。

昨年11月に横浜国大の青木先生にお願いして、ダニ類を中心とした土壌生物の研修会を行いました。それ以来ダニに魅せられた？人もあり、高価なダニ類図鑑が6冊も買入れられました。

折角の知識が忘れ去られないようにとのことで、相互研修としてダニ類の名前調べを行いました。参加者の持参した標本や現地等で採取した土から出てきたダニを顕微鏡で見ながら、ワイワイと勉強しました。

しかし、知識の少ない者が何人集っても文珠の知恵とはいかないようで、誰かが名付けたものを、ヘーそうカーと見つめるばかりで終わったようでした。でもこうして名前や形に何度か接しているうちに、やがてはダニが分ってくることと思われ

ます。

自然を動かしているのは、大型の植物や動物が主役のように見られ勝ですが、微小なダニやトビムシ、さらには細菌などの役割は相当大きなものがあります。自然を愛する者はダニも好きになればとまでは言いませんが、時にはこのような世界ものぞいて欲しいと思います。

運営委員会 4月15日（土）

中小企業センターにて、11名の委員により開催しました。

始めに、6月4日に行います全県一斉自然観察

会について検討しました。今年は、面ノ木峠（稲武町）を始め、善師野（犬山市）、小幡緑地（名古屋市）、任坊山（半田市）、子供の国（幡豆町）、豊橋公園（豊橋市）、湯谷周辺（鳳来町）の7カ所で開催されます。6月4日は、環境週間の前日ですが、環境週間にちなんで「水について考えよう」をテーマとし、水不足、水質、治水などについて考えるような自然観察会にしたいと思います。会員の皆さんの御協力をお願いします。

当日は、水生生物とバイトラップを統一調査とし、また統一アンケートにより効果等を把握したいと考えております。

次に、今年の研修計画の一部を検討した後、自然観察会実施マニュアルの前半を検討しました。

協議会としてどのような自然観察会をめざし、また自然観察会の企画をする場合にどのような点に注意したらよいかをまとめたものです。出来上ったら各会員に配布する予定です。

協議会が発足した頃は、まだ自然観察会という言葉も一般には知られていなかったものが、今では毎週のように県下のあちこちで自然観察会が催されるようになりました。ここで一度、私たちは何のために、どのように自然観察会を行うべきか考えてみることも大切なようです。

（佐藤国彦）

協議会の研修会計画（6月以降）

7. 22～23 視察研修

中央アルプスの千畳敷等で高山植物の観察を行います。懇親を兼ねての旅行です。

8. 19～20 樹木の分類研修（第1回）

茶臼山で、温帯性樹木の名前の勉強会を行います。樹木分類の基本を学びます。

10. 8 樹木の分類研修（第2回）

渥美半島の泉福寺等で、暖帯性樹木の分類について勉強します。

11. 25～26 自然観察指導員研修会

知多半島で、指導員として必要な知識や観察の仕方についてお互いに検討するものです。（問合先：佐藤国彦05617-3-5674）

行 事 案 内

5・14(日) 尾張支部 月例観察会 犬山市八首国有林もみの木駐車場 9:00 (テーマ) 夏鳥のさえずりと新緑ハイク
5・21(日) 西三河支部 県委託観察会 刈谷市洲原神社境内 9:00 (テーマ) 雑木林の生物達
6・4(日) 協議会 全県一斉自然観察会 協議会 稲武町面ノ木峠駐車場 10:00 名古屋支部 守山区小幡緑地 同上 尾張支部 犬山市名鉄善師野駅前 9:30 知多支部 半田市任坊山 同上 西三河支部 9:00 東三河支部 豊橋公園美術博物館 9:30 奥三河支部 湯谷周辺 10:00 (テーマ) 水について考える(環境週間)
6・11(日) 尾張支部 月例観察会 春日井市内津神社境内 9:00 (テーマ) シイの花に集まる昆虫の観察
7・9(日) 尾張支部 月例観察会 犬山市継鹿尾観音駐車場 9:00 (テーマ) 夏は甲虫達のシーズン
7・9(日) 知多支部 野外研修会 武豊町中央公民館 9:00 (テーマ) 梅雨期のキノコの観察
7・16(日) 東三河支部 一般公募観察会 一宮町江島橋下の河川敷 9:00 (テーマ) 夏の水辺に自然を探る
7・22(土)～23(日) 協議会 視察研修 中央アルプス木曽駒ヶ岳 (テーマ) 高山植物の観察と会員相互の親睦 (申込み) 各支部幹事又は佐藤国彦さんまで

お 知 ら せ

◎ 全県一斉自然観察会の開催について

昨年に続き、環境週間に合わせて全県一斉自然観察会を開催します。今年の統一テーマは、現在の私達の切実な問題である「水について考える」としました。

一人でも多くの参加者が得られるようPRに全力を尽すと共に、指導員の皆さんもできるだけ参加して下さい。

◎ 協議会の研修の開催について

1 視察研修「中央アルプス木曽駒ヶ岳」

左の行事案内の通り、7月22日(土)から23日(日)にかけて、中央アルプスの雄、花崗岩の白い麗峰、木曽駒ヶ岳で視察研修を行います。特産のコマウスユキソウを始め多くの高山植物が見られる予定です。定員20名。

2 講座研修「樹木分類研修PartI」

今年から始まる“樹木分類の基礎講座”の第1回を、8月19日(土)～20日(日)にかけて、稲武町面ノ木峠ブナ林と豊根村茶臼山のウラジロモミ林で行います。新城市の植物研究家鳥居喜一先生と内部講師が案内します。定員25名。

なお、詳細は佐藤国彦さん(05617-3-5674)又は北岡まで御連絡下さい。

【編集後記】

編集子の転居と転勤によりニュースの発行が遅れたことを、まずお詫びします。

野山は新緑にあふれ、花には昆虫達が訪れ、私達にとっては一番楽しい時期がやってきました。自然観察指導員はフィールドに出てこそ本領が発揮できますので、休日には日頃の忙しさを全て忘れて、みんなを誘いあわせて海へ/山へ/田んぼへ/出かけましょう。新しい発見が、きっとあります。(北岡)

編集事務局：瀬戸市柳ヶ坪町98-5

北岡明彦 (0561)84-2953